

項目 1：SSH への参加をすることで、質問①～⑤について利点を意識していた。

項目 2：SSH への参加をすることで、質問①～⑤について効果があった。

質問①～②

質問①SSH への参加を通じて、科学技術・理科・数学の面白そうな取組などを意識していたか

質問②SSH への参加を通じて、科学技術・理科・数学に関する能力やセンスが向上したか

◎

経年変化を見ると、肯定的な回答は R2 年度には 30% 台であったが、R3 年度以降は増加傾向を示し、R5 年度には 50% を超え、R6 年度もその水準を維持している。この変化は、SSH 活動の定着により、生徒がその活動の面白さを認識し始めたこと、具体的な能力やセンスの向上が実感できるようになったこと、を示していると考えられる。さらに、SSH の多様な取組は、生徒の理科・数学への学習意欲や関心を喚起し、指定前と比較して、より幅広い層の生徒が自己の能力やセンスの向上に効果を感じるようになっている。このことは、理数系分野における裾野の拡大につながっていると捉えられる。

質問③～④

質問③理系学部への進学へ役立つ

質問④大学進学後の分野探し

◎

経年変化を見ると、R2 年度には肯定的な回答が 20～30% 台にとどまっていたが、その後は次第に増加し、R4 年度以降は全国平均を上回る結果となっている。

全国平均を上回る水準でこの傾向が見られることは、本校の SSH が理系分野への進学意欲を高める取組として成果を挙げていることの表れである。加えて、校内アンケートの結果からも、研究体験や大学連携講座を通して「学びが大学進学や学部選択に具体的につながる」と実感する生徒が増加している。研究や発表会への参加を通じて「自分のやりたい研究テーマ」や「興味分野」を語ることができる生徒が増えてきたことが、進学支援としての機能を果たしていると捉えられる。

質問⑤ 国際性の向上

◎

経年変化を見ると、肯定的な回答は全国平均が R5 年度まで横ばいで推移していたのに対し、本校では R5 年度に大きく伸び、R6 年度には全国平均と肩を並べる結果となった。この伸びの背景には、R3・R4 年度においては国際交流の機会が限られていたため、生徒が効果を実感する度合いが低かったものの、タイ王国 KVIS 校との連携協定に基づく海外連携プログラムや沖縄科学技術大学院大学（OIST）研

修といった本校独自の取組が着実に成果を上げたことが考えられる。

全国的にもコロナ禍後の国際交流が再開したことにより、R5 から R6 にかけて全国平均そのものも上昇傾向にある。しかし、本校は全国に先駆けて急伸していることから、単なる社会的要因によるものではなく、独自の国際的取組が全国的な動きに先駆けて効果をもたらしたことを示している。

項目 3：SSH の取組に参加したことで、資質、能力が向上したか。

◎

R6 には、本校は多くの項目で肯定的な回答が全国平均を上回っており、特に「③未知の事柄への興味」「⑪独自のものを作り出そうとする姿勢」「⑩粘り強く取り組む姿勢」「⑭探究心」については全国を 5 ポイント以上上回った。これらは本校が育成を目指す 6 つの力に直結するものであり、SSH の目標が着実に校内に浸透していることを示している。

▲

一方で、「②科学技術に関する学習意欲」や「⑯成果を発表し伝える力」は相対的に低い水準にある。項目 1 で「科学技術・理科・数学の面白さを認識し始めた」「具体的な能力やセンスの向上が実感できるようになった」と回答する生徒が増加しているが、その興味・関心が必ずしも学習意欲の高まりに直結していないこと、また発表機会の増加にもかかわらずプレゼンテーション能力の向上を十分に実感できていないことが要因として考えられる。したがって、興味・関心が学習意欲に繋がるための授業改善や発表の場におけるフィードバックの質・量を高め、生徒が成長を自覚できる仕組みづくりが求められる。

▲

さらに、「⑨協調性やリーダーシップ」は全国平均に比べて低く、「一人一研究プログラム」における対話や議論の不足が影響していると考えられる。今後は探究過程において協調性・リーダーシップを育む場を設定するとともに、個々の貢献を評価に反映させる仕組みを整える必要がある。

全体として、本校は、I 期指定当初、多くの項目で全国平均を大きく下回っていた。しかし、R6 にかけて全国平均に並ぶ項目が増加している。R6 の結果は前年度と比較してわずかに減少傾向が見られるが、これは R4 から R5 にかけての急伸に対する反動と捉えられるが、II 期の開始にあたっては、特に低下が見られた項目について下げ止めを図ることが重要である。また、伸びを示している項目についても、現状にとどまらず全国平均を超える水準を目指して取組を継続・発展させることが求められる。

(文責：福田)